

ウェッブ夫妻

小山 路 男



I アプレンティスからパートナーへ

1880年代から20世紀初頭のイギリスは大きな転換期にあった。経済自由主義の無限的発展を謳歌していたビクトリア期の栄光は次第にうすれ、イギリス資本主義は国際的にも国内的にも大きな困難に直面することになる。後進の資本主義諸国、とくにドイツの急速な発展は「世界の工場」を自負していたイギリスの地位を脅かし、帝国主義競争において守勢にまわらざるをえない。しかも国内では繁栄の影のなかに潜在していた貧困の問題がブースやロウントリーの社会調査によって明らかにされ始めると同時に、社会主義的な労働運動や民主的団体の活動が活発となってきている。変革の時期がいつでもそうであるように、それはまた来るべき社会への展望を求めての混迷と探索の時代であった。

重要なのは当時イギリスが直面していた問題がひとりイギリスに限らず、程度の差はあっても、資本主義諸国に共通の課題であったことである。そうしてまた、この課題はまさに世紀の問題として今日にいたっても解決がせまられているのである。ウェッブ夫妻が提起した問題設定が、現在においてもなお検討に値するのは決して単純な学説史上の興味にとどまるのではない。ただし、以下で取り上げたいのは、夫妻の残した多彩な業績のすべてについてではない。すでによく知られているように、

夫妻は労働運動史や労働組合論においては先駆的な研究を残している。さらにまた『イギリス地方自治体論』(*English Local Government*) 全11冊というモニュメンタルな業績がある。このほかに、イギリス資本主義の数々な分析、フェビアン協会での活動、さらにはソヴィエト・コミュニズム論にいたるまで、数えれば実に多数の著書論文が残されている。これらの文献のすべてに当って本格的なウェッブ論を展開することは、少なくとも私の能力をこえている。以下で述べてみたいのは、私が学んだかぎりの狭い範囲でのウェッブの姿にはかならない。

シドニー (Sidney James Webb, 1859—1947) とビアトリス (Beatrice Webb, 1858—1943) とは1892年に結婚した。彼らのパートナーシップはこの年から始まり、それ以後の仕事のほとんどすべてが夫妻の協力の産物であった。私たちはそのどの部分がシドニーで、どこまでがビアトリスの仕事であるかを見分けることのできないほど、両者の結合は強固である。そうしてまことに困ることは、それまでのアプレンティスの時代についてビアトリスの場合には彼女の *My Apprenticeship*, 1926, によってくわしくわかるのに、シドニーについては自叙伝も伝記も残されていないことである。恐らくは、ビアトリスが名門ポッター家の出自であるのに、シドニーは中産階級の下層の家に生れたためであつたろう。社会的身分階層の区別がきびしいイギリス社会では、シドニーが学者としても政治家としても成功した後でも、なおその前半生を語ることを妨げた事情があるのではないかと思われる。このようなわけで、彼の結婚前の生活については諸説があり、とくにビアトリス自身が *My Partnership* で述べていることと、彼女の姪 Kitty Muggeridge の『ビアトリス・ウェッブ伝』(K. Muggeridge & R. Adam, *Beatrice Webb*, 1967) の記述とは一致していない。後者の方はシドニーに好意的ではなく、ポッター一族の感情を物語っているようである。

シドニーはロンドン子である。彼の父の職業は理容師とも小売商ともあるいは収税吏ともいわれ、最後の職業が経理士であったことは確実である。いろいろな仕事に

転じている理由は、彼の父が病弱であったため、不規則な収入しか稼げなかったからであるらしい。彼の母はロンドンの中心部で小売商を営み、これが一家の生計を支えていた。彼の生れた家はこのようにつましやかな小市民の生活を送っていたが、彼の父はラディカルな思想の持主であり J. S. ミルが 1865 年にウェストミンスターで立候補したときは熱心な支持者でもあった。彼の母は教育に熱心であり、シドニーと兄のチャールズを最初はフランス語を学びにスイスの学校へ、次にドイツ語勉強のためにドイツの牧師の家庭に留学させた。シドニーがドイツから帰国したのが 16 歳であり、しばらく家業を手伝って 1878 年 20 歳のときに陸軍省に勤務した。しかもその 3 年後にはむずかしい行政官試験に合格し、以後 10 年間は植民地省の官吏を続ける。この間、1885 年には弁護士の資格を取っているし、さらに重要なことは同じ年にフェビアン協会に加入したのである。

フェビアン協会が Frank Podmore, Edward Pease, Hubert Bland らによって設立されたのは 1884 年のことである。当時シドニーはすでに社会主義を信奉し、バーナード・ショウらと別に研究グループをもっていた。そうしてショウが協会設立後 9 ヶ月で入会してから、仲間のウェッブとその友人 Sydney Oliver とに加入をすすめたのである。1885 年 5 月、ウェッブは正式に会員となった。そうしてこのとき以来、ウェッブはバーナード・ショウ、グレイサム・ワラスらとともにもっとも中心的な人物として活動することになった。とくに 1889 年にウェッブが Fabian Essay に発表した漸進主義的社会改良の論文は、彼の名声を高めるとともにフェビアン協会の指導的理念ともなった。そうしてまた、ビアトリスがウェッブの名前を知ったのも、この論文を読んでからである。2 人のめぐり合いは理論を通じてであった。

ビアトリスはグロースターの富裕な実業家 Richard Potter の 9 人の姉妹の 8 番目に生れた。彼女の父および母の家系はそれぞれ産業革命期から発展した Captain of Industry の家柄であり、彼女は Standish の広大な邸宅で召使いにかこまれ、家庭教師によって教育を受けた。彼女の家にはビクトリア時代の名家にふさわしく多数の客が出入していたが、とくにスペンサー (Herbert Spencer, 1820—1903) が彼女の才能を愛し大きな影響を与えたことは彼女自身の書いている通りである。

ビアトリスの父リチャードは材木の取引で産をなした後、鉄道業に関係していた。このために彼はしばしばその娘たちを連れてアメリカやヨーロッパを旅行していたが、上の娘たちがそれぞれ結婚し、とくに 1882 年に妻

が死亡してからは、ビアトリスが父の忠実なホステスの役割を果たすことになった。そうして当時の上流階級の婦人がそうであったように、いつしか COS の慈善活動に参加するようになったのである。

ビアトリスはスペンサーの自由主義にも COS の慈善事業の精神にも満足しえなかった。そうして、1887 年、義理の従兄に当たるチャールズ・ブースの有名なロンドン調査に参加するに及んで、貧困原因の研究に大きく惹きつけられて行くのである。彼女の行ったロンドンのドック労働者の調査や、イースト・エンドの苦汗産業の婦人労働者についての調査は大きな成功を収めた。それと同時に、彼女は「中期ビクトリアの時代精神の完全な体现者」と彼女自身が名付けたブースの考え方から次第に遠ざかり、「産業は命令を下す階級によってではなく消費者の団体によって、消費者としての彼らの共通の利益のために統治されるべきである」と考えるようになった。彼女はこの観点から協同組合運動に関心をもち、その研究が Beatrice Potter, *The Co-operative Movement in Great Britain*, 1891. となったのである。

ウェッブと知る前、ビアトリスは一度だけ結婚を考えたことがあった。その相手がパーミンガム市長として名高い J. チェムバレンであったことは興味深い。この帝国主義者で社会主義者、保守主義者で急進主義者として有名な政治家に会ったのは 1883 年 6 月であった。彼女自身は *My Apprenticeship* でもこの恋愛についてはふれていないが、K. Muggeridge はその事情をくわしく述べている。チェムバレンは当時すでに 47 歳、2 度目の妻を失って配偶者を求めていた。美人で当時 25 歳のビアトリスに目をつけたのは、チェムバレンの妹たちであった。ビアトリスもまた彼の社会改良主義に興味を持ち、その後 4 年間交際を重ねるが結局は結婚できなかった。チェムバレンが「従順で賢明な妻」を要求したのに、ビアトリスは自己の意見の尊重を主張したからである。妥協して家庭をもつためには、両者の自我があまりにも強すぎた。しかもビアトリスはチェムバレンの社会主義政策に関心をもち、チェムバレンはビアトリスの社会調査を評価していた。なおこの事件で夢中になったのはビアトリスの方であったという説もあるが、Muggeridge によると実際はどうともいえないらしい。いずれにせよ、これが彼女の一生の唯一のエピソードとなった。

自由主義の家に生れながら社会主義への道を歩んだビアトリスの精神史は、そのまま当時の精神状況の変化を物語っている。私たちが大きな興味を感じるのも、このためであろう。一言でいえば、その方向に彼女を走らせ

たものは当時のイギリス社会の大衆窮乏であった。彼女はその中に資本主義社会の矛盾を見た。そうしてこれを改善する方法は、消費者による社会の統制としての協同組合であり、労働者たちの団結でなければならないと考えられたのである。

ウェップはその父と同じくミルの信奉者であり、バーナード・ショウの言葉を借りれば「レディ・メードの社会主義者」であった。ビアトリスがシドニーを Fabian Essay で知った時、シドニーもまたブースの調査において最もすぐれた報告を書いた女性としてビアトリスを認めていた。彼女はフェビアン協会の活動に興味を持ち、若いフェビアンたちを自宅に招待したいと申し出る。バーナード・ショウは「貴女こそこちらへお出かけ下さい。このライオンは馴らせません」と彼一流の皮肉な返事を出した。1890年2月、ロンドンの大ドックストライキの2〜3ヵ月後、ビアトリスはミュージアムに近い友人の家で、ブース家の人々とともに初めてシドニーと会うのである。このときからアプレントイスの時期は終り、彼女が愛情をこめて The Other One とよんでいるシドニーとの、パートナーシップが始まったのであった。

II 課題としてのナショナル・ミニмум

シドニーとの結婚についてはビアトリスの側に問題があった。彼女の父は長く病床にあってその看護に当らねばならなかったし、ポッター家の人々はすべて「独学で高級官僚となった知的プロレタリア」(ホブスボームの言葉)であるシドニーに好意を持たなかった。スペンサーはもとよりブースも、彼らの結婚に反対であった。父の死後まで結婚を延ばさざるをえなかったのである。

しかし結婚までの2年間に彼らの共同作業はすでに始まっていた。まずシドニーはかねてからの希望通り官界を去り、ロンドン市議会員に選出された(1891年)。この意味を理解するためには、当時のイギリスが地方自治組織の恐らくは最初の本格的改革の時期にあったことを知らねばならない。すなわち、1832年以後も完全に取り残されていた地方自治は、都市を中心とする地域問題の重要化にともなって、徹底的な改革を要求されていた。1888年のカウンティ・カウンスル法の改正を手始めとして、地方自治の民主化をはかる方策が取られたのである。なかでもロンドン市会(LCC)の改革は当時のフェビアン主義者たちの重要な目標であった。救貧法、公衆衛生、住宅、教育などに進歩派の立場から発言し、これを改良することは彼らの当面の実践課題であった。シド

ニーが LCC に参加した意義はそこにあったし、これ以後の彼の努力は主として教育問題に集中された。彼は職業教育問題に取り組み、後にはその委員会の長にもなった。また 1902〜03 年のパルフォア教育法の成立にも協力したし、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスの設立を提唱もしたのである。

シドニーの理想は彼の社会改良主義を現実の政治の場で実現することにあった。1910 年までの LCC における活動は、その第一歩であった。これに対してビアトリスの関心は、協同組合運動から労働組合へと移行して行った。そうして彼女は結婚以前から、資料の収集、整理、評価についてシドニーの協力をえていた。彼女の最大の弱点が歴史的感覚の欠如であることを、彼女自身がよく自覚していた。この点ではシドニーの卓抜な記憶力と判断力が、彼女の仕事を支えたのである。

ウェストミンスター・グロウプナ通りで始まった夫妻の生活は、午前中は共同研究と執筆、午後はシドニーは LCC へ行きビアトリスは資料を調べるという日課であったようである。そうして、このような生活から生み出されたのが *The History of Trade Unionism*, 1894. と *Industrial Democracy*, 1897. であった。このうち労働組合史論は夫妻の労働組合研究のための序説的役割を果たしたものであるが、その水準の高さにおいて、また当時としてはこの種の研究がイギリスはもとより国際的にも少かったためもあって、労働組合史論の古典的地位を獲得した。今日においても、それはこの方面の研究については必読書であり、その後の研究成果がウェップ説の部分的修正を要求しているのは事実であるが、なおその価値を失ってはいない。わが国の研究者たちも本書の影響を大きく受けているのである。

これに対して労働組合の理論としての産業民主制論は、労働組合史論の栄光にややもすればかくされて、しるべき評価を与えられなかったきらいがある。けれども、ナショナル・ミニмум論が明確に打ち出されたのは本書においてであり、この意味でも見逃すわけには行かないのである。

ナショナル・ミニмумの発想は疑いもなくビアトリスによって提出された。彼女が消費者による資本主義社会の統制を重要視し、その手段としての協同組合運動の研究を行ったことはすでに述べた通りである。だがそれと同時に、彼女はイースト・エンドの苦汗産業の実態調査を通じて低賃金・低労働条件の弊害をつぶさに知っていた。そうしてその除去のためには、すべての労働者に一定の最低の雇用条件を確保するように、資本主義企業は

統制されなければならない。この統制は労働組合の団体交渉によって、あるいは労働組合やその同調者の圧力によって得られた立法によってすでに行われつつあった。けれどもスペンサーの自由主義に強く影響された体験から、彼女は労働組合にはさまざまな反対論があることをよく知っていた。新技術の導入に反対して工場の改善を妨げる、ストライキを行う、直接的には規約により間接的には徒弟数制限によって生産高を規制する、労働市場の流動化を妨げるなどがこれである。労働組合は「雇用条件の維持または改善のための組織」（労働運動史初版の表現、それ以後は労働生活の諸条件と改められた）ではあるが、このような反対にどう答え、労働組合の得失をどう評価するかが彼女の問題であった。

『産業民主制論』第3編第3章「労働組合運動の経済的特質」は彼女とシドニーがもっとも苦心を払った部分であり、ナショナル・ミニマム論はこの関連から展開されている。彼らはまず労働組合の人員規制は当時すでに時代遅れの方法になっているとして、大きな弊害をみとめていない。労働組合の役割は雇用条件について産業間に共通規則（common rule）を強制して行くことにある。賃金率、労働時間、安全衛生等の労働者生活全般にわたって、共通の、それ以下に下ってはならない最低限度の規則を形成するのは労働組合運動の基本的なメリットである。文明生活の最低限水準をナショナル・ミニマムとよべば、労働組合はその実現と確保のための最有力な手段となるであろう。そうしてこれを通じて、生産者としての労働者の利益は増進される。

けれども、このような共通規則の強制は国民経済に過大な負担を課さないであろうか。ウェッブはこの疑問に対して断然と否定する。共通規則は労働者の獲得において、産業間の競争において、適正な条件をつくり出す。正当な労働能力を持たない者の賃金は標準以下とならざるをえないから、労働者は生産性の上昇に積極的となるであろう。雇主もまた高い賃金や労働条件に見合うだけの能率の向上に努めざるをえない。ナショナル・ミニマムのための共通規制は、かくして国民的効率（national efficiency）の向上につながることによって正当化される。そうしてこの標準的な諸条件以下の諸産業、とくに苦汗産業はその発展の基礎を国民経済的基盤への寄生に求めている。この寄生産業の駆除と苦汗労働の廃止こそが、ウェッブにとっては課題とされたのである。

消費者としての労働者はまた生産者でもある。そうして重要なことは、この両者の立場がしばしば対立することである。ウェッブはこの矛盾を市民という性格におい

て止揚しようとした。課題としてのナショナル・ミニマムはナショナル・エフィシエンシーの向上によって、市民生活の安定と向上に結びつけられると信じたのである。消費者と生産者を結ぶ環としての市民の概念は、すぐれて中産階級的な国家主義の性格を持っている。ウェッブ夫妻が労働組合への理解を深めながらもついにその同調者とはならず、当時の労働者の政治活動には冷淡であった理由は、ここに求められるであろう。夫妻の親しかったのは旧派の熟練工組合の幹部であり、もっとも嫌ったのはたとえばケア・ハーディーであった。

1899年から3年間にわたるボーア戦争はイギリスの世論を分断した。それは自由党のみならず、フェビアン協会をも分裂させたのである。ローズバリやチェムバレンに代表されるリベラル・インペリアルリストたちは、帝国主義競争に勝ち残るためには古典的自由放任主義に反対して社会改良を行うべきであると主張した。帝国主義と社会改良の結合の必然性は労働者階級の戦争協力を得るためにも、さらにまたより基本的には国力の基礎である民力を培養するためにも強調されたのである。

他方、大多数のフェビアンにとっては、彼らの社会主義ないしは社会改良の理想をこれらの政治勢力と結びついて実現する方が有利であると判断された。これに対しては、帝国主義戦争そのものに反対するラムゼイ・マクドナルドらの反対意見があった。フェビアン協会はボーア戦争に対する見解をめぐる内部対立が起り、ついに分裂してしまう。少数派は脱退し、多数派は帝国主義との結合をいまや公然と主張し始めたのである。

1900年10月のいわゆるカーキ総選挙は、文字通りカーキ色の軍服を支持する帝国主義者の圧倒的勝利をもって終る。この年の11月16日の講演でローズバリは、帝国主義の第1条件は活力にあふれ、勤勉で大胆な帝国の民族（Imperial Race）であると強調した。ウェッブは *Nineteen Century* の1901年10月号の論文“Lord Rosebery's Escape from Houndsditch”でこれに関連して、真の帝国主義者は社会改良家でなければならないと主張した。帝国の力の基礎は民族の力であり、それはナショナル・ミニマムの確保による国民的効率の向上によって確保されるのである。

シドニーのこの論文は大きな成功をおさめたが、彼の目的は伝統的自由主義への反対と社会改良の促進にあった。彼もピアトリスも、さらにはフェビアンもローズバリらの政治家を全面的に信頼していたのではない。だが政治権力を利用しようとした功利的な打算は、その当然の結果として手ひどい反撃を受けることになった。課題

としてのナショナル・ミニマムは、いまや帝国主義の政治的イデオロギーに転化する。そうしてそれは、彼らにとっては不幸な選択であった。

彼らの失敗はローズバリの自由党内における勢力の過大評価にもあった。彼はその後党内で孤立し、ウェッブと自由党の結合は次第に弱くなった。さらに1902年の教育法をウェッブが支持したことは、自由党の指導者たちの感情をすっかり冷ややかなものとした。1905年12月、キャンペルーバナマン内閣が成立したとき、ウェッブはふたたび連けいを取ろうとしたがこれも失敗であった。

今日の眼から見て、当時のウェッブを帝国主義者と規定し、これを非難するのはきわめて容易である。だがそれだけでは、ウェッブの提唱したナショナル・ミニマムの理念が今日まで生き残っている理由を説明しえないであろう。たしかに彼らの政治的失敗は一時的なものではなく、むしろ本質的にすぐれて中産階級的な体質に結びついている。だがそれが福祉国家理念の重要な起源となっている事実、今日のイギリスを評価する場合にも否定し得ないのである。

III 救貧法委員会と「予防の機構」

1905年12月に成立した自由党内閣が1911年の国民保険法まで、一連の自由主義的社会改良立法を行ったことはあまりにも有名である。ロイド・ジョージとウィンストン・チャーチルによるリベラル・リフォームの重要性については、これまでもしばしば研究されてきた。だがそれと同時に重要なことは、総選挙を目前にしていたバルフォア内閣が救貧法に関する王立委員会(The Royal Commission on the Poor Law and the Unemployed)をこの年の12月に任命したことである。この委員会はそれ以後、1909年にいたるまで、救貧法に関する問題点を徹底的に追求した。その報告書は多数派と少数派に分裂し、しかもその提案はほとんど実施されなかったが、そこで争われた論争点はイギリス社会政策の全ての問題点にかかわるものであった。

救貧法委員会は当初20名の委員から構成されていたが、最終的に報告書に署名したのは18名であった。このうち14名は政府当局とCOSの立場を代表し、4名は労働者と社会主義の立場を代表していた。報告は14名の多数派と4名の少数派に分れることになったのであるが、少数派の事実上の指導者はビアトリス・ウェッブであった。

ビアトリスはシドニーとともに私設の調査組織を持

ち、その調査結果を委員会の討議に反映させようとした。委員会は彼女にとっては彼らの理念を「浸透」させる絶好の場所であった。そうして足かけ4年間の討議のなかで、多数派もまた彼女の主張に大きく影響されることになった。その結果、委員会は全体として1834年原則、すなわち貧困を個人の道徳的責任として刑罰の対象とすることは不適當であることを指摘した。また将来は救済に代えて窮乏の「予防と治療」に重点を置くべきであり、そのための対策は何ごとも公費でなさるべきであることを指摘していた。

多数派と少数派に分裂した最大の原因は、その方法論にあった。多数派は各地に公的扶助委員会(Public Assistance Committee)とともに自発的援助委員会(Voluntary Aid Committee)を設置することを主張した。VACは綿密な調査によってニードを測定し、必要かつ十分な居宅保護を行う。PACはVACの予防的、治療的扶助によっても解決されない貧困者を対象とする。したがってVACはCOSの組織活動をより強化したものである。VACは社会事業の立場から予防と治療に当るのであるから、その給付はPACよりも高くなければならない。私的慈善と法的扶助の結合が多数派の主張であった。

少数派はこれに対して「二枚舌の主張」であると反論する。1834年原則を否定しながら私的慈善の優位を説くのは、新しい形態での低位性原則の導入であるというのである。彼らは各自治体ごとに教育、健康、養育院、年金の四者について委員会を設け、これを調整するものとして公的扶助当局を当てることを主張する。地方自治行政を機能的に再組織し、窮乏原因ごとにその根源をさぐり出し、これらを絶滅することが必要である。したがって「救貧法の解体」(Break-up of the Poor Law)が少数派のとくにウェッブ夫妻の基本的主張であったのである。

ウェッブの「救貧法の解体論」は既存の組織、とくに救済委員会(Board of Guardians)の廃止をねらっていた。救貧法が公的扶助と名称を代えようとも、慈善事業的な地方の名望家支配を打破することなくしては地方自治の民主化はあり得ず、したがってまた有効な窮乏対策は不可能となる。そこで問われたことは、公的扶助の近代化のためには市民参加の途を開かなければならないが、そのためには地方自治の民主化は不可欠の前提である。しかしそれを実現するためには、果してどのような方策が取られるべきであり、また実現の可能性があるか、という問題であった。今日の社会福祉活動の基本的

命題を、恐らくは無意識のうちに先取していたところに、ウェッブらの主張の大きな意味があったと私は考えている。

かくして、救貧法論争を通じて明らかにされた「予防の機構」をどう形成するのかが、ウェッブの当面の課題となった。LCC における体験は、地方自治の改革こそがそのもっとも有効な対策であるとウェッブを確信させていたのであろう。このためにウェッブは窮乏対策の実施は地方自治体の徹底的な改善なくしては不可能であると確信していた。しかし窮乏が社会の疾病として、資本主義社会全体の問題として考えられなければならないとするならば、問題は社会政策としてのみならず経済政策のそれとしても検討さるべきであった。地方自治の改革はそれ自体重要な命題であり、差別的救貧法の解体が緊急課題であったことは当然ではあったが、ナショナル・ミニマムの確保はそれに尽きるはずのものではなかったのである。

ロイド・ジョージのリベラル・リフォームは、ウェッブの主張とはほとんど無関係に進められて行った。唯一の、しかし重要な例外は失業保険についてであった。若き日のビヴァリッジは1907年に失業論を書き、職業紹介制度と失業保険の創設を構想していたが、ウェッブはこれに対して好意的であった。彼らの「ボーイ」をチャーチルに紹介したのも、ウェッブ夫妻である。だがウェッブとチャーチルとの関係は少しも親密ではなかった。ましてロイド・ジョージに対しては、ウェッブは敵意すら持っていたようである。

1911年の健康保険法にウェッブが反対した最大の理由は、保険料拠出のみを条件とする無条件の給付にあった。給付の無条件性は受給者の個人的責任感を弱め、仮病さえも奨励するかも知れない。少なくとも当時のウェッブは、社会保険のもつ合理性とか所得再分配機能についての理解を欠いていた。彼らの目ざしたものはもっぱら少数派報告の基本的立場「救貧法の解体」をたたかい取ることであった。政府が委員会報告を実施する意思のないことがわかると、ウェッブ夫妻は実践的な政治活動のなかでその主張を通そうとした。そうしてそのための機関誌として1913年には *New Statesman* を発行し始めた。もし第1次大戦が発生しなかったら、彼らの運動はみじめな結果に終わったかも知れない。政府も資本家も労働者たちも、ごく少数の例外を除いては、ウェッブの運動に冷淡だったからである。

後に『イギリス地方自治体論』の一部として *English Poor Law History*, 2 parts, 3 vols., 1927—29. が書

かれたとき、ウェッブは社会保険についての誤解を修正し、さらに「予防の機構」(Framework of Prevention)の理論的整理を行った。かつての帝国主義的立場は清算され、文明生活の最低限度としてのナショナル・ミニマムの確保のためにいかなる制度やサービスが発展してきたか、その果すべき役割は何かという問題が研究されている。1905—09年の王立委員会が建設的観点からすれば完全な失敗であったことを、ウェッブは素直にみとめた上で彼らの理念の再構成をはかったのである。

「予防の機構」は旧救貧法が「抑圧の機構」(Framework of Repression)であったことへの対比として用いられている。貧困の救済はかつては身分的従属と抑圧の枠の中で与えられていた。しかし、産業革命期以後のさまざまな制度やサービスの発展は次第に「予防の機構」と名付けられるものを形成しつつある。それはごく大きく分けて4分野にみられるであろう。その第1は立法による最低限確保の方法であって、工場法や最低賃金法さらには労働組合法がこれに属する。第2は地方自治体の行っている公衆衛生、病院サービス、児童および身心障害者福祉、学校給食等がある。第3のグループは社会保険と年金制度であって、これらは強制的節約として窮乏の防止に役立っている。そうして最後に第4として、これら諸制度ならびにサービスの発展にともなう中央行政組織の特殊専門化と能率化をもたらしている。

ウェッブは「予防の体系」が完成したとも当時の現状が適当であるとも主張しているのではない。当時の行政やサービスがいかに重複し混乱して非能率となっているか、しかも各種制度の果している機能と効果がいかに不十分であるかは、ウェッブの強調して止まないところであった。ウェッブにとってはナショナル・ミニマムは窮乏を予防するすべての方策の総体によって確保すべきものであり、その方策の判断基準は国民的効果でなければならない。

もとより、ウェッブの理論には論理的に未整理なところが残されている。予防の機構をこのように総合的に把握しようとするれば、これら諸方策のプライオリティとコンシステンシーをどのように決定すべきかが問題となろう。さらにまた、ナショナル・ミニマムが固定的な水準ではなく発展向上すべきものであるとすれば、その動態論的な解明はいかになさるべきかという問題がある。そうして最後に、国民的効率の観点は帝国主義と結合する必然性はないにせよ、なお福祉国家がもつ国家主義的性格をどのように止揚しようのかというミュルダールが提起している問題もある。かくして、課題としてのナショ

ナル・ミニマム論はウェッブにあってはついに課題にとどまらざるをえなかったのである。

「予防の機構論」を通じて一貫しているのは、社会改良主義者としてのウェッブの理想と情熱である。その思想的あるいは理論的欠点にもかかわらず、また実践的失敗にもかかわらず、ナショナル・ミニマムの理念をついに生き残らせ、福祉国家理念の重要な起源としたものはこれをおいて他にはないであろう。そうして福祉国家イギリスを実現したのは、彼の後継者たちであったことも不思議ではないのである。

IV 晩年とその死

第1次大戦後のシドニー・ウェッブは労働党の主要メンバーとして活動した。彼は労働党の執行委員として Labour and New Social Order の綱領を起草し、1918, 22, 24 年の総選挙をたたかった。彼自身も 22 年の総選挙では国会議員に選出されたし、24 年の労働党内閣では商務省長官として入閣した。さらに 29 年内閣では植民地相に任じられた。そうしてこの年にはウェッブ夫妻の意思にもかかわらず、周囲からの強い圧力によって Baron として上院に入ることになった。彼の Lord Passfield というのは、夫妻が当時住んでいたハムプシャーのパスフィールドの地名をとったのである。夫妻はその後間もなく引退したが、ビアトリスは終生パスフィールド卿の称号を用いようとしなかった。

彼らの晩年は、かくして政治的にも世俗的にも栄光につつまれていた。しかし資本主義社会の将来については、ウェッブは著しく悲観的であった。1932年ソヴィエト・ロシアを旅行したとき、彼は革命の手段による社会主義社会の実現に感動した。Soviet Communism, 1935. の著書は、彼の漸進主義の修正と評価されたものである。

第1次大戦後のシドニーの政治活動については、労働党史家の教えを待たねばならない。また、夫妻が残した数多くの著書の研究と評価も私の任ではない。ただ、ウェッブの読者としての感想をいえば、何よりも集積された資料やデータの重みを痛感する。ウェッブの理論的弱点を補い、しかもその書物を今日でも読むに値するものとしているのは、何よりもこの点にあると思われる。そうしてその事実のなかから帰納されてくる政策的主張は、その賛否を問わず強い迫力をもっているのである。

引退後のウェッブ夫妻については、あまり多くを語るを要しないであろう。夫妻は生涯を通じて金銭に執着を持たなかった。それはひとつにはビアトリスの財産収入が彼らの生活を十分に支えたためでもあるが、余分な収入はすべて社会に還元する主義であった。ビアトリスはその晩年に、彼らの遺産はすべて奨学資金としてパスフィールド財団に残すと遺言している。

ビアトリスは1943年に、シドニーは47年に死亡した。シドニーはその死の3年前の44年に社会科学への功勞によって Order of Merit を授与されていた。彼らの遺骨は Passfield Corner に葬られた。しかしそれも長くはなかった。

シドニーの死後、当時91歳であったバーナード・ショウはウェッブ夫妻の遺骨をウェストミンスター寺院に葬るべきであると『タイムズ』に投書した。かくして1947年12月12日、ウェッブ夫妻の遺骨はウェストミンスター寺院に改葬されたのである。900年の歴史のうち夫婦そろってここに葬られたのはウェッブが最初であった。人々は互いに「どちらがシドニーでどちらがビアトリスか」とささやいたが、誰にも答えられなかった。ウェッブ夫妻は互いに最良の The Other One として、人人の尊敬を集めてこの世を去ったのである。

次号 (Vol. 5, No. 2) 予告

巻頭言	鈴木 武 雄
論 文	
地方自治と社会保障	岡 村 重 夫
地方行政と国民健康保険	中 村 正 文
地方財政と社会保障	小 沢 辰 男
自由論題	籠 山 京
資 料	
生活総合調査	前 田 正 久
研究会ノート	松 本 浩 太 郎